





第七 可專思慮事

或人云人の貴賤をいふは物の心づかざるよりなるべし
 多私をとりて人家をたてし身をたてしは道徳よく業で
 何事につけても身を安んずるは眞實の業と宗と
 其方け学ば相とげじご一愚かりぬむといふ親のあまや
 ころちのころもてあまといふといふころちあまらざる
 であらしてかりきり人末の事と糸つちか又親と相と
 りあまに告ぐやいといふ人後の毒ぬくころちの事ぬ
 教するをあまに不侵かりふせりてのいといふその好り
 人は人の報いあまらる物なればいふにようは能く無益



かりん青やうとわらん我くてあらんがりの傳つた也
中なかついでとほましく人ひと甚とと深ふかのすうとまきしとつれが
らゝん公こうのわさ方かたより物ものまればとらりとさして
いひもむとわらむらた友ともとわらむら酒さけのよと
好このむ物もの美みよをぬらう程ほどよぬらうつたれたのん生せい
立た也や見みて親おやも子こも中なかつよりよりある事ことあり
うふものまほく宮みやはさのいそとどしとら振ふる舞まひとす
といふ入いれらうもれれ佛ぶつ林りんの廣ひろくな生せいは憐あはれと
ども不信ふしんの者ものの利り生せいはわづらう事ことありま人のまひ
くけらん人をとて縁ゆかりども不用ふようの事ことよ思おも願ねがはし

かじとるれい大方おほひかたの道理道理さる事ことなれどもとる不ふ作さくも
かしてうら果くわ報ほうを朝あささんる事ことよ不ふ意いのうらもい也
くまむととい者ものの公こうのいそと物ものくさく性せい乃すなはちいれそ
不ふ覺かくかろうがうた不ふ也や先まづありと振ふる舞まひと用もち意いして
うのう果くわ報ほうと待まちの流ながれよ棹さかさんかぶと潮うしほ見み濕ぬ土つち泥どろ
変かはりぬ進すす水みづとまはは華はな徑みちよとら続つづたれいさむ
方かた不ふ覺かくさはむれ程ほどらもらう事こととんこり乾かん
燥そうの土つち中なかつよりさぐ一夜ひとよぬ水みづと得うか事ことのわらうらな
自みづか又また不ふ終しゆう不ふ忠ちゆうの者ものとよれとありとわらむとら続つづたあ
生せいの宿しゆく若わ厚あつくこつて骨ほねこそわらめ打うちのけとら



智^ちい^いと^との^の事^じん^ん務^むの^のま^まひ^ひと^とる^る鳥^{とり}よ^よの^のし^しら^ら株^{くわ}と^と字^じふ^ふ愚^ぐ
 ま^まに^にさ^さら^られ^れば^ばよ^よご^ごれ^れ海^{うみ}の^の人^{ひと}の^の下^げ界^{かい}の^の人^{ひと}よ^よ付^つい^い水^{みづ}の^の
 浦^{うら}が^が子^こが^が遠^{とほ}業^{わざ}へ^へ行^いく^く人^{ひと}昔^{むかし}務^むと^とい^いよ^よの^のつ^つひ^ひは^はる^るめ^めと
 ち^ちよ^よと^とい^いや^や少^{すく}い^い者^{もの}属^{ぞく}と^とる^るい^いと^とし^し也^{なり}顔^{かほ}回^{まわ}り^り賢^{けん}者^{もの}を^をれ^れた
 不^ふ幸^{こう}や^やて^て早^{はや}く^く死^しし^し盗^と路^ろの^の賊^{ぞく}徒^とを^をれ^れば^ばも^も壽^{じゆ}延^{えん}して^{して}お
 へ^へる^るい^い理^りの^の外^{ほか}さ^さし^しに^に非^ひず^ずち^ちと^とく^く例^{れい}と^と信^{しん}と^とぶ^ぶさ^さや^や樂^{らく}天^{てん}
 書^{しよ}法^{ぽう}よ^よと^と

去^{しよ}者^{もの}道^{だう}遙^{とほ}来^き者^{もの}死^し乃^{すなは}知^ち禍^{わざはひ}福^{ふく}不^ふ天^{てん}為^{なり}
 是^{こゝろ}の^の事^じ則^{すなは}ち^ち字^じが^がを^をれ^れば^ばい^い漢^{かん}の^の周^{しゆ}と^と字^じが^があ^ある^る事^じと
 や^やめ^める^る古^こ訓^{くん}四^し顧^この^の内^{うち}に^に落^おち^ちる^るや^やい^いは^はよ^よ付^つて^てと^と三^{さん}界^{かい}

かそあそびんといひて谷よりけのぢりつらねのこぼれ
びりり寄ける松さけき海は荒く目眩とぬく哀をう
くふらにいひちけんとや眩しうせんり秘くあひ
よもも身重くかうもくあしてよりいひたれい荒く
て谷より入ぬくあそびんといひて思やぢのまを続
中わん定て秘わがんとんととる程よ若れ危れ
あつて水絶といれ我身と散るに打損とて只あめ志
われい弟子者余とつた寄つていふとこいひつて
一息の通ふ身也とれどあつて坊へうと入ら
集むらん多しのあつて帰つてつらに世僧才のあ

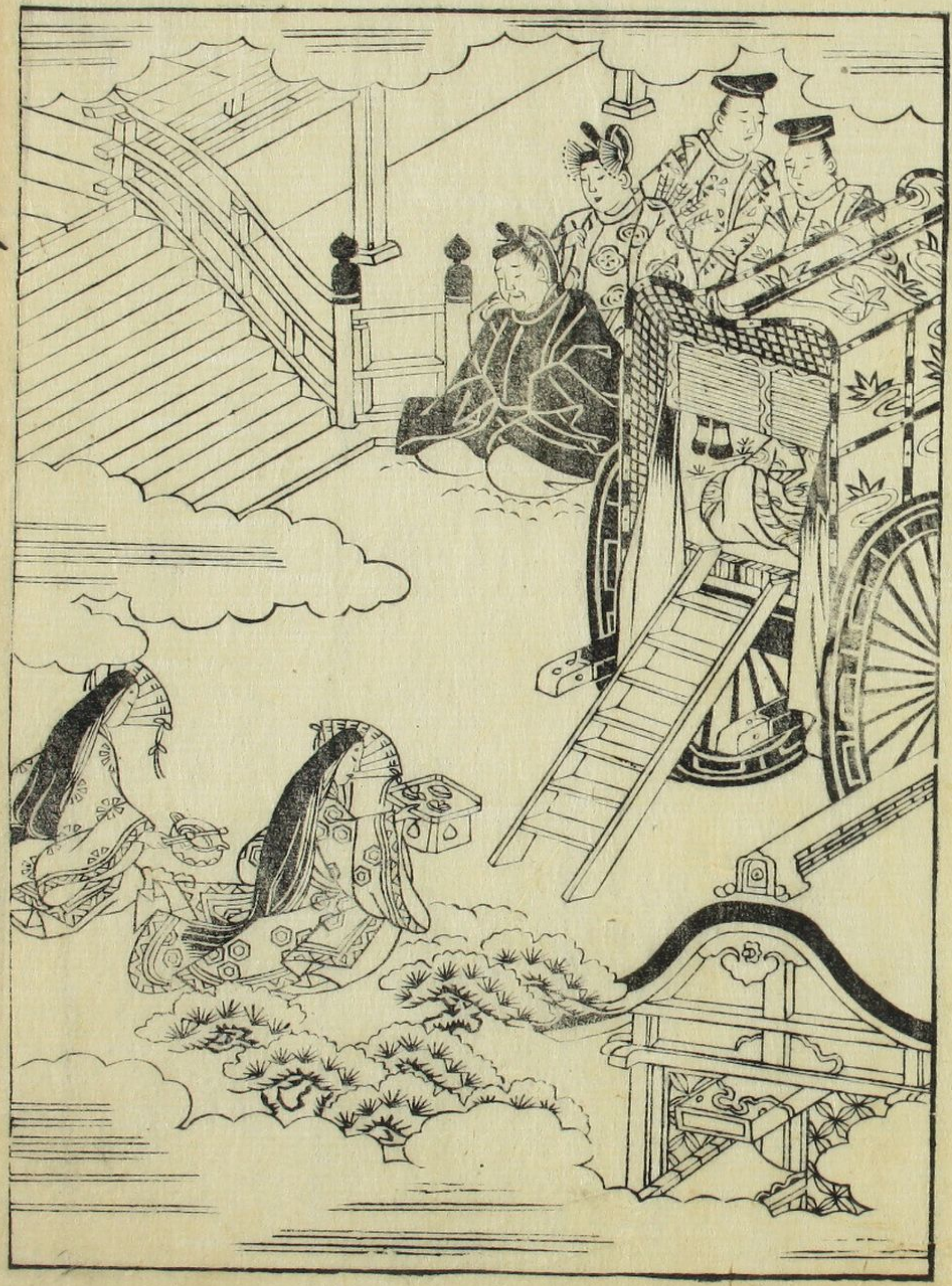
らぬやうに痛外とてうつらうわくそ弟子と死
あつてあつて間ねの葉とつらに今せとれと
年はつみくくといひはる五穀とてとあつて
あつて今つらにいひたれと足は腰とつら新て紀居とえ
きん今にねの葉とつらと及つてとれと五穀とつら
今つて弟子とつらとゆきとつら坊と宝と石返
とつらとゆりあつては道とつら人さやうとつら
文集よの賤と今骨の相とつら丹皇のふみとつら
とつらとあつてつらとつらとつらとつらとつら
げつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら
つらとつらとつらとつらとつらとつらとつら

今但唐玄宗の宮に西王母西王母の仙女ありて仙桃とて
 されりける此種と我宮ありとせんことこのはりさ
 くらぐれに王母くら多しとてその菓人間よとまら
 かくやるともこれふといまうくら帝ごんはかく
 思おもはれくゆくれば此僧は証得えたりとせめて未
 得謂得のむゆとくらとくらとあり也

二延喜年中は美濃國伊波の山は千手陀羅尼の持者
 任またり二三日なりとて都舎とて験得の方より魚鱗多
 くらとくら向遠近のま賤基り群くら何より善宰相
 清行きよゆきの是瓜岡とて彼所へゆきて此僧は對面

して物語とてあひらうが侍のくはに語云此人のかく行
 徳あるゆきまれば無智れ同終くは魔界のま先ぬ
 るづうくらとて帰かへりくらくらこのち行るて
 或何あるに誅とらふ女世雲よふきて被樂まはさく玉れとて
 何よりあく此僧とけり人取く去くらくらる者衆く
 皆奇異のさといとれくらくらむふやむ百方く樵たきまの
 とい入くらくらけりくらくら本ありとて救のゆ中くらんれ
 くらくらむやえくらくらむやとて人ぬけむくらくらんれ
 近色の行人基りて是とくらくら人のやくらくらんれ
 くらくらむとてのちくらくらあきらむらむれ菓くだみらと

池子にみまゝ入るゝ扇形とけさそをのきんさび
 てまうて馬車のおよりまゝとらば馬並にまうてみま
 を入させておまこ一わうて馬並をまびさきんわうを
 押へはしめまじり二人きざりけのよりのあうぬさうり
 中やふまじりかゝる女房れ扇形とら又掃り
 とうてまらいつわいせいのねの枝よ何うう綿まつて
 ころ物紙付とら紙おくるをのきんさびとら様とらして
 由東へまら何しとめをきうたれ物とらうまら
 中らう枝山那の危れうたれとら山那のきんさびとら
 をとらう人いせまらう女房馬車へまうてまらうのまら



よそとけいぶくもろくさくく写りて鮮くはしめしきり
史師明ししより同名を記せがつたれあらんはきり其
の記よりあ

つらぬい高麗がくまのねらむかむはきりかみ

⑥ 高麗帝は時を思ひ書きしる書書かきり野
相公に上はきりしにけりけりけりけりけり
つらぬいこのありぬんかむのいさきあきりてさそいけり
不ありく作れけりけりけりけりけりけりけりけり
たねよすしえぐく中しきりけりけり

一伏三作不來待書晴障雨徳筒寝

やうきをけり思ひよあそけりきり

月よんかみまふかむけりしあそきんけりてけり
とよろくたけりけりけりけりけりけりけりけり
よじありさきさきしきり思ひけりけりけりけり
しきりしきり物しきりあそきりけりけりけり
作世奇きり集けりしきり人きりけりけりけり
けりしきりけりけりけりけりけりけりけり
をけり集けりしきりけりけりけりけりけり
奇しきり不審也

(七) 曾仲尼門徒と具して活きけりふ或あは垣

材本結りては花の中づれけりいぢりぬとぞよま
くろくろくろく深きもどいひのどい

① 南都林懐信都連のちり終るる向本津の人乃
家やで鮮魚と求く合とあまを中け誹謗しとる
うしが毒の月以腹うりて命去ぬべし一件の夜更
ハ童子方そ林懐が獲けりて腹とるやれて難稼
をとりおれとるあまとる腹いゆ日念遣は見てり夫
く世由瓜告常の人よあぢとちりて早思のあま
とと急と求くすめくろくこれか聖いくも馬瓜ま
らつぬ事一有

② 仁海僧正の小島瓜くつれくるもせされびとよのつひお
傍此まの瓜とるくば定中信守のさむいつる事ありあや
系極原大納言雅信のゆふ謙を約くる小導師妙
覚ちの静信は下ねくまろく瓜あぐととぞに鏡の
傍とれい傍照よ付てくいくる向まろくとるけりぬ急と
取かくしぬりくる静信我前のさろく瓜みるふ箸か
ろとけとべ懐よりぬ瓜ぬと出て物とるくといりくる
何の料よ持よりけるせとと方とより下とばまぞのく
とるくろくもり思ゆの用念よいあけ縁とたまなぬ
地らとるくろく奥ありてわくくさぬよりく賢人のた長

まじいなる付の世と云ふやみえたる其後一と人お
りてとらり絶く久く成る人ふらふ音信するに
ふまわれどあつてつねにみえたることせしむる
是れ公のしんをたよらして也選し成る人の儼し
え出さしよ付てと志づらうらわの中の中と書きて
べしとの例の人世をいふらうく其後返事をうた
つてわづ一是の信らうらうらあり候しとあつて
かた方強いてせしめたりしんて文らうりしけりま
しきやあやしくんぬしき事あはれ書けるよのさ
うあはれ及右の中よりあつていふとあはれの人らうり

とせらる物をししん人うらわらうていふづうかゝる人と
抑へども落らうてをねいれどもあはれと事とあはれ
ふうれ事也彼北方うやの春宮太史公實の女は信
門院の清妹あり女院も付系もそと鳥羽院にて何く
路も中ら花園よ入給路らな彼家より菊たのびり
うら孤院よりたなれは戸しきうあつてねしむとび
けしむとまらまけふ
九星はあはれも菊はあはれもすうたをねのしりら
や中らり紙にてふんあつてうらうらとあつて此故と
人いしける彼實の信らうらうら白くあはれなる紅梅の

奇名^{キナ}在^在重^重りりける付^付見^見て訪^訪詰^詰るれば恩^恩向^向の有^有恐^恐悚^悚千^千四^四但^但
白^白字^字奉^奉不^不可^可し^し志^志却^却と^とと^とり^りま^まる

文^文四^四の^の菊^菊是^是草^草中^中他^他と^と云^云は^はは^はと^と結^結く^く作^作え^えざ^ざり^りま^まれ^れの^の衣^衣狐^狐
引^引入^入る^るお^お秘^秘け^ける^るふ^ふ保^保衛^衛ま^まく^く今^今度^度や^や何^何と^と云^云ま^まれ^れば^ば不^不
及^及力^力も^も得^得乃^乃秀^秀る^るれ^れの^の善^善く^くん^ん彼^彼草^草葉^葉孤^孤ん^んを^をれ^れハ

蘭^蘭蕙^蕙莖^莖冠^冠摧^摧紫^紫後^後 蓬^蓬菜^菜洞^洞月^月照^照霜^霜中^中

と^と云^云は^はり^り是^是已^已り^り秀^秀る^る也^也何^何疑^疑結^結べ^べま^まと^と云^云向^向と^と不^不此^此結^結
を^を出^出す^す亦^亦よ^よ世^世以^以秀^秀然^然自^自作^作の^の事^事の^のみ^みり^りま^まり^り計^計ら^らん^ん
え^えぬ^ぬた^たり^りま^まり^りの^の事^事を^を可^可思^思慮^慮に^にれ

